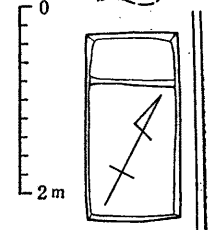
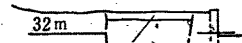
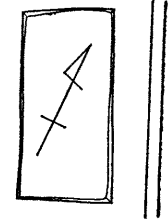


1. 第1トレンチ



2. 第2トレンチ



3. 第3トレンチ

第18図 三嶋藍野陵  
トレンチ平面および  
断面 (1/80)

遺物は、  
埴輪円筒一  
三片、陶器  
一片、磁器  
二片、炆器

第1トレンチ (第18図1) 旧表土の上を客土が覆う。これは、昭和六十一・六十二年度施工の外堤内法裾の石積護岸工事の際、掘削残土を外堤上に盛上げたものである。旧表土下には、径二〇センチ以下の大小の河原石を数多く含む盛土層である。磁器・炆器を包含する。ただしIII層中のイ層は遺物を包含せず、地山の可能性が残る。盛土層と切合った攪乱がトレンチ東壁沿いに南北に走る。その中に埴輪片を含む。

第2トレンチ (第18図2) 表土の下は厚い盛土で、粘土小塊・小さな風化した河原石を含む固い砂質土である。上部から埴輪片が出土した。この層の下部には、間に上層と同質の土を含む拳大の風化した河原石からなる礫層がある。

第3トレンチ (第18図3) 表土は、トレンチ北半が踏固めたように固く、一部を客土が覆う。表土の下は、盛土で、第2トレンチと同じく粘土小塊を含む砂質土である。風化した埴輪片のほか、発掘床面近くで陶器片が出土した。

以上のとおり、第1トレンチのイ層に検討の余地があるが、調査範囲は後世の盛土層で、埴輪列等の遺構は検出されなかった。

一片の計一七片である。いずれも小片である。翌平成七年三月二十・二十二日の二日間、新設する金網柵の基礎掘削工が行なわれた。これに立会って調査したが、どの基礎掘方からも埴輪列等当初の遺構は検出されなかった。

(笠野 毅)

男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地外周埴垣改修その他  
工事に伴う調査

宮崎県西都市に所在する西都原古墳群は、学史的にも著名なわが国多数の古墳群である。近年、関係機関により古墳の位置する西都原台地の土地改良事業に伴う事前発掘調査が実施され、また、古墳の再実測なども継続的に行われつつあり、当地の古墳研究は新たな段階に突入したといえよう。

一方、本古墳群の盟主的存在である男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地においても、それぞれに所屬すると思われる埴輪が知られるようになったこと

とにより、その具体相が明らかにされつつある。

このようになさなか、男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地において、外周埴垣改修その他工事を施工することとなり、平成六年十二月十九日～二十四日に事前調査を、翌年二月七日～十日には本部職員による立会調査を実施した。併せて同年一月二十三日～三十日の工期中には、地元西都原古墳研究所所長日高正晴氏に立会調査を委託し、工事によって遺構遺物が損なわれることのないよう、万全の配慮をした。また、調査に際しては、宮崎県教育委員会の長津宗重氏、西都市教育委員会の養方政幾氏はかに資材の提供等、多くのご協力を賜った。

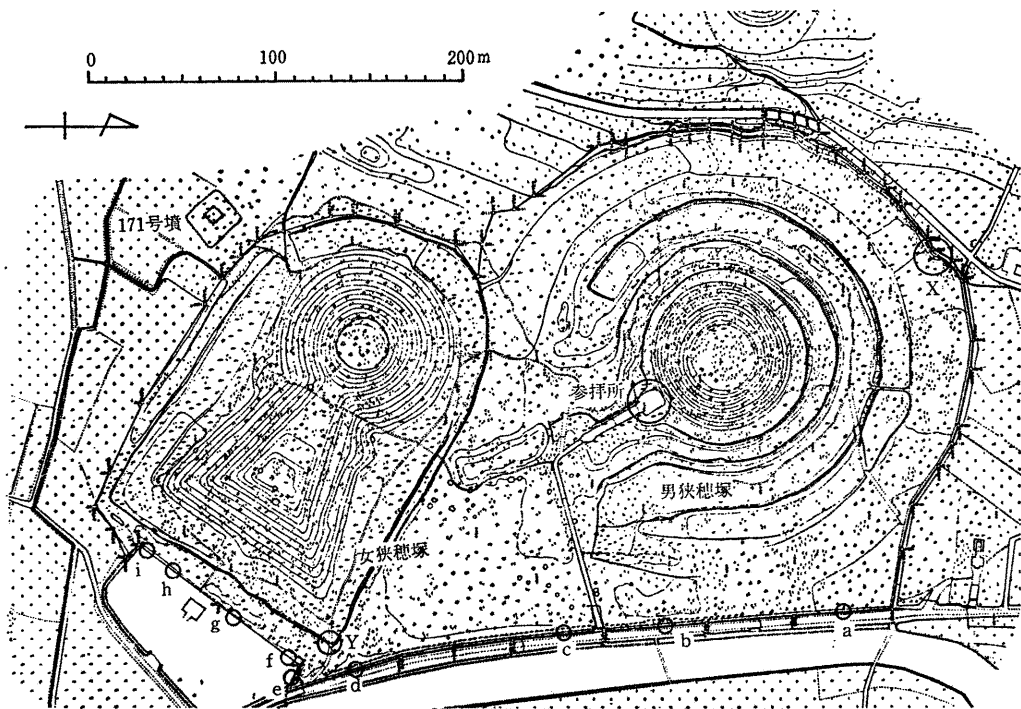
施工の場所と内容は以下のとおりである。

- ①. 金網フェンス柵取設、及び境界線保護工―男狭穂塚女狭穂塚西側外周（境界線）部分
- ②. PC擬木柵取設―男狭穂塚女狭穂塚東側の県道沿い（境界線）部分
- ③. 参道入口石柱・鉄扉取設、水道管布設―男狭穂塚参道入口部付近
- ④. 男狭穂塚参拝所整備

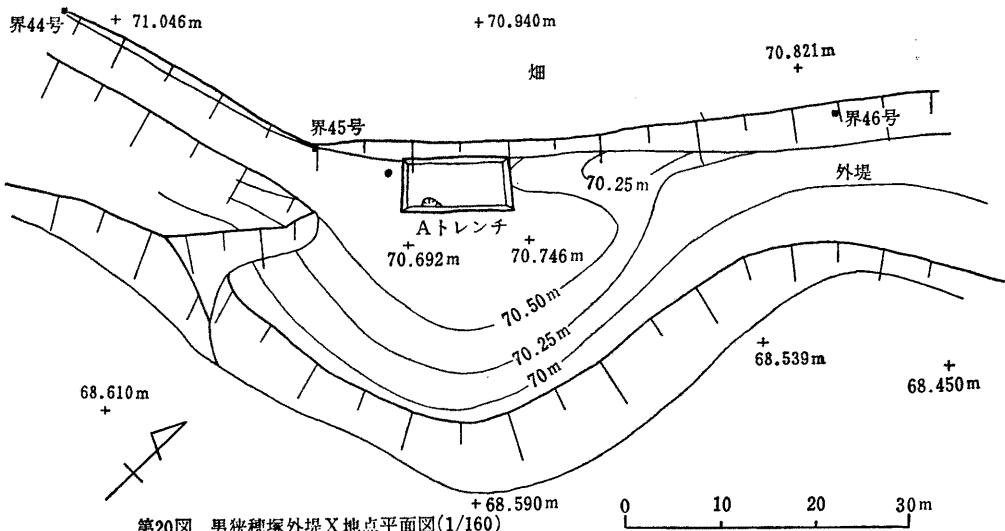
以下、今回の事前調査、本部立会調査、委託立会調査それぞれによって得られた所見を報告する（第19図）。

#### 一・男狭穂塚

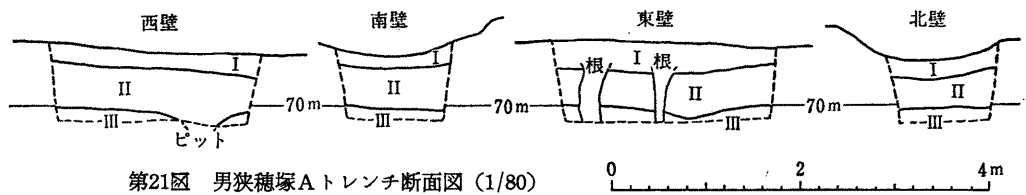
男狭穂塚は、その詳細な墳形は明らかにしえないものの、径二二八メ



第19図 男狭穂塚女狭穂塚調査箇所的位置 (1/4000)



第20図 男狭穂塚外堤X地点平面図(1/160)



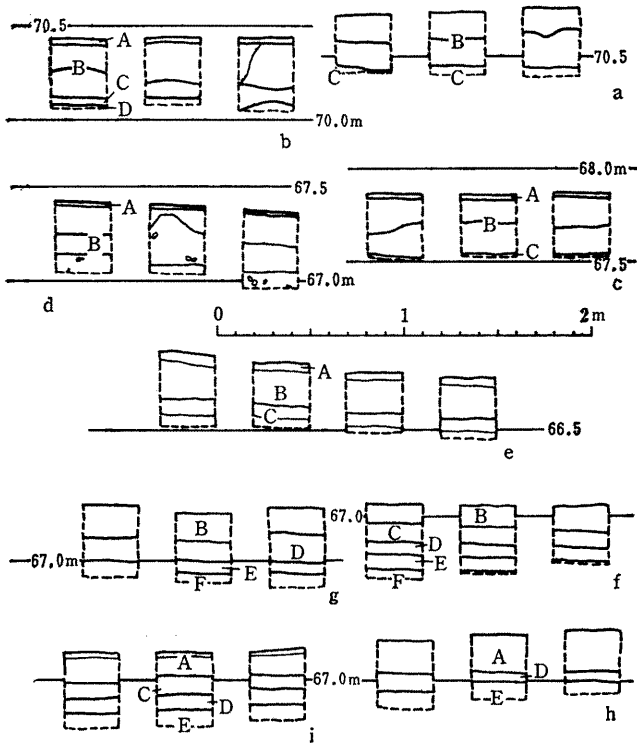
第21図 男狭穂塚Aトレンチ断面図(1/80)

トール前後の円丘部に張出し部を伴う張出し付き円墳、もしくは帆立貝式の古墳であろう。隴を二重に巡らしており、雄大な規模を誇っている。

① 金網フェンス柵取設、及び境界線保護工箇所

現在、男狭穂塚の境界線は外堤の内法・外法肩部、もしくは内法裾部にあるが、参拝所側からみて後円部背後の外堤部が一部、隴側に約七メートル張り出している箇所がある(第19図X)。高さは二メートルを超え、古墳等の可能性もあると考えられた。そこで、金網フェンス柵取設予定箇所の一部に長さ二・二メートル、幅一メートル、深さ〇・七メートルほどのトレンチを一箇所(Aトレンチ)を設定し、調査を行った(第20図)。層序は、木根などによる攪乱をうけていた箇所があったものの、I…暗茶褐色の腐植土(表土)、II…黒色土(後世の盛土—近現代の磁器の小片が一点含まれる)、III…アカホヤ火山灰(地山)、となっていた(第21図)。境界線側の壁面に近い床面に、深さ一〇数センチの浅い不整形の落ちこみが認められたが、その性格は判らない。アカホヤはトレンチ内では、各地点ともレベルがほぼ同一で周囲に広がるようである。狭い調査範囲であり即断はできないが、注意を要する箇所であろう。

本工事に伴う掘削は約四七〇メートルの距離を最大で深さ六〇センチほどであったが、そのほとんどは上述のI及びII層内にとどまっておろ、遺物も検出されなかった。



第22図 男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地PC  
擬木柵取没箇所の断面図 (1/40)

②、PC擬木柵取設箇所、③、参道入口石柱・鉄扉取設箇所  
PC擬木柵取設、及び参道入口石柱・鉄扉取設箇所は本陵墓参考地の東沿いに走る県道西都原古墳線に面した小土堤を呈するところである。この小土堤は県道のレベルに比べて七〇〜八〇センチほど高くなっており、そのほぼ最高所を一・五メートル間隔で各箇所ともそれぞれ四〇センチほど掘削した(第22図a・b)。従って、掘削箇所は女狭穂塚前方部外堤正面の南隅角部を起点として三〇〇箇所近くを数える。該所の基本

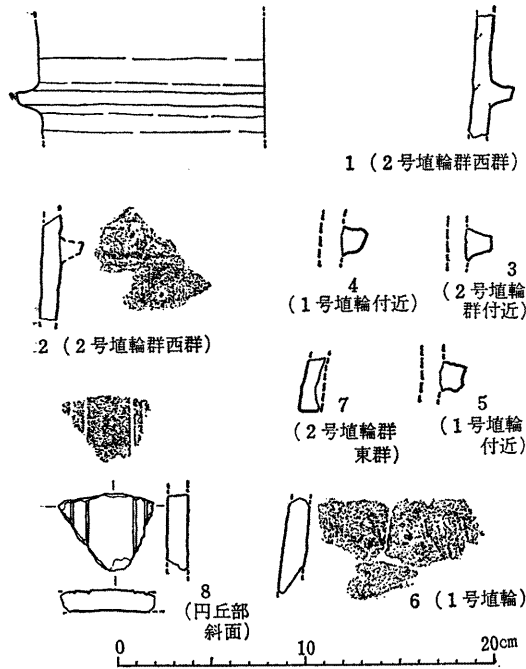
的な層序は、A…暗茶褐色の腐植土(表土)、B…黒色もしくは褐色土(盛土)、C…アカホヤ火山灰(地山)、D…黒色土、E…黒褐色土、F…褐色土、であった。男狭穂塚部分では、地表下約三〇センチまではA、もしくはB層で、その下位に地山であるアカホヤが認められた。その上のレベルは、男狭穂塚参道入口部の北側約三四メートルの地点(第19・22図b)で七〇・一五メートル、約一六〇メートルの地点(第19・22図a)で七〇・四五メートルであり、北側に向けて標高を上げているのがうかがわれる。このレベル差は現地形とも対応し、旧地形を復元するに際しても参考となるであろう。

④、参拝所整備箇所

現在の参拝所は、主丘部が張り出している箇所に相当する。かつて可愛塚神社が建っていたこともあり、最上段テラス面より約六〇センチ低くなっている。以前、その周辺から埴輪片が出土したことがあり(本誌第四号参照)、その後原位置を保つと思われる埴輪円筒一個の存在も知られていた。そこで、施工にあたり損傷をうけることがないよう、その正確な位置関係や樹立状態等を確認することとなった(第23図)。

まず、参拝所の主丘部に近い箇所、その地表面を覆っている厚さ二〜三センチの黒色土混じりの玉砂利層を幅〇・六メートル、長さ二メートルほど除去すると、二箇所にわたって埴輪片のまとまりが認められた。東側部分は、以前から知られてい





第24図 男狭穂塚の出土品 (1/4)

た埴輪で一個のみが原位置を保ち(一号埴輪)、並んでいるような状況は確認できなかった。その周囲にサブトレンチを設け、掘り方の検出などにも努めたが、一部にそれらしき土層の相違を認めたものの、円形となるのか、布掘りとなるのかはわからない(第23図2)。遺存の高さは約五センチで、アカホヤをブロック状に含む黒色土を基底面としていた。つまり、盛土中に裾えられているのが注目されよう。

また、一号埴輪から一メートルほど西側部分で、埴輪片がややまとまって検出された箇所があった(便宜上、二号埴輪群と称す)。いずれも五センチ角以内の小片からなり、二箇所にとまっていたが、原位置と

呼べるような関係ではなかった。

#### 出土品

今回の調査による出土品は、九六点である。うち、九四点が埴輪で、他の一点がAトレンチから出土した磁器である。いずれも小片となっており、摩耗が著しいこともあって、調整手法を明らかにしえるものは少ない。

埴輪(第24図1~8) 一点を除き、円筒系(円筒形、朝顔形)の埴輪であろう。男狭穂塚から出土した埴輪については、以前報告したことがあるが(本誌第四四号参照)、今回の出土品も同様の特徴を有している。つまり、淡いベージュ色を示すA類と、淡黄褐色ないし茶褐色系(1~8)の色調を呈するB類との二種ある。いずれも内芯は黒灰色を示している。4には黒斑が認められる。今回の出土品において、A類は少なく、図示できるほどの破片はないが、胎土に多くの小中砂粒を含み、それらが器表に露呈している。一方、B類においても小中砂粒は観察されるものの、含有量は少なめで、より緻密な胎土を使用している。一号埴輪、二号埴輪群ともにB類の特徴を有することは注意しておくべきであろう。

調整手法はA類では明らかにしない。B類では、外面を細かいタテハケメで一次調整した後、ナデを加えて二次調整としている(1・2、6)。径を復元できる資料は少ないものの、1は胴部上端で二五センチほどとなる。突帯は概して突出度が高く、いずれも一センチを超える

(1・3～5)。胴部との接合部に刻線等は1、4・5では認められない。3では浅い沈線が横走しており、胴部側に何らかの意匠があったことも考えられよう。7は底部として復元したが、底面とした部分がヨコナデによって調整されており、他の器種となる可能性もある。

8は形象埴輪である。器種は明らかにしない。図示した方向で記述を加えると、縦走する四条の沈線が認められる。左右方向にはわずかに内彎しているが、上下の彎曲はない。どちらかといえば、B類の色調を有している。

磁器 一センチ角未満の小片である。内外面ともに淡いコバルトブルーの染付が認められる。江戸後期のものであろう。

## 二、女狭穂塚

女狭穂塚は全長一七五メートルを計る九州最大の前方後円墳である。三段に築成され、両括れ部付近には造り出しが認められる。周囲に楕形が空陸がめぐっているが、後円部西南部分では一部、墳丘側から外堤部にかけてやや高くなっている箇所がある。

本地においても、その外周部に、①・金網フェンス柵取設、及び境界線保護工、②・PC毅木柵取設、といった諸工事を施工することとなり、前述のような調査を行った。

### ①・金網フェンス柵取設、及び境界線保護工箇所

施工範囲は、男狭穂塚に境界を接して、女狭穂塚の陪冢的位置関係に

ある一七一号墳(旧一一二号墳)付近までである。

本工事に伴う掘削は約六〇センチであったが、男狭穂塚の該項で述べたI及びII層内におさまっており、遺物も検出されなかった。

### ②・PC擬木柵取設箇所

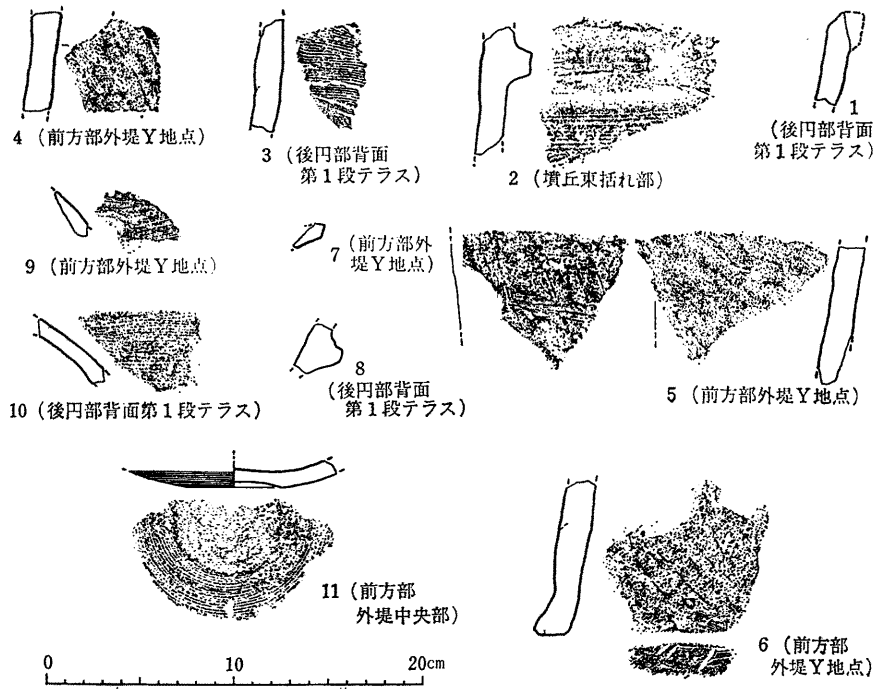
当該工事は女狭穂塚関係では、前方部外堤正面の南隅角部から東側を縦走する県道に沿って、男狭穂塚参道入口部まで及ぶ。その間を男狭穂塚部分と同様、一・五メートル間隔で約四〇センチづつ掘削した。

女狭穂塚の前方部外堤正面は大広場となっているが、その南端部分から約五メートルの箇所では、前述の厚さ二〇センチ余りのA層(表土)の下部に、C層(アカホヤ)、D層(黒色土)、E層(黒褐色土)が認められた(第19・22図i)。ここでの地山はC層以下の部分で、その上面のレベルは六七・〇メートルである。このC層のレベルは大広場の北端付近近でもほぼ同様である。ただし、外堤正面付近ではC・D層は観察されず、標高六七・一〇～六七・一五メートルでE層となっている(第19・22図g・h)。

大広場の北端付近は東南方向に舌状に張り出している。最南端(界一号付近)(第19・22図e)でのC層上面レベルは六六・五五メートルで、調査範囲では地山が最も低くなる箇所である。ここから県道に沿って北上すると、途中B層(盛土)のみで、地山の検出されない箇所もあるものの、地山のレベルは徐々に上がっていき、界一号から約一五五メートルの地点(第19・22図c)で六七・六メートルのレベルを示す。以下、男

狭穂塚の項で記した前述のレベルとなる。

また、今回の直接の掘削箇所ではなかったが、本地前方部側の外堤内



第25図 女狭穂塚の出土品 (1/4)

法肩の北側の切り通し状を呈している箇所において、埴輪片がまとまって認められた(第19図Y)。据えられた状態ではないものの、該所にも埴輪が樹立されていたことを示すものであろう。

#### 出土品

今回の調査によって採集された出土品は三六点である。そのほとんどは埴輪片で、陶器、瓦の小片を各一点含んでいる。

埴輪(第25図1~10) 円筒形、朝顔形がある。男狭穂塚の項で分類した色調ほかの特色で述べれば、そのほとんどはA類であり、二点のみがB類である。なお、女狭穂塚でB類が確認されたのは今回が初めてであるが、色調以外の胎土の特徴はA類に酷似していることに注意しておきたい。図示したものは、いずれもA類である。外面調整はヨコハケメ、もしくは右下がりの強いナデである。2ではヨコハケメの静止した痕跡をとどめるB種ヨコハケメであり、3ではヨコハケメが一部重なりあっており、下位ではさらにナデを加えている。内面も強いナデによって仕上げられている(5)。

円筒埴輪の口縁部は剝離してはいるが、肥厚させ、突帯状にした形態のものと考えられる。外面にわずかにヨコハケメ痕が認められる。突帯をとどめている例は一点のみであるが、断面台形を呈し、重厚な観を伴う(4)。透し孔の形状は4で円系であることが知られる。胴径は復元できる例では二センチ前後となる(5)。底部(6)では、自重のため、底面近くで内側に張り出している。

朝顔形は口縁部(7)、口頸部屈曲点付近(8)、肩部(9・10)がある。9・10では赤色塗彩の痕跡が認められる。

陶器 11は上底の土師質の製品である。体部はカキメによる調整である。外面には煤が付着し、内面は全面灰色の釉がかかっている。

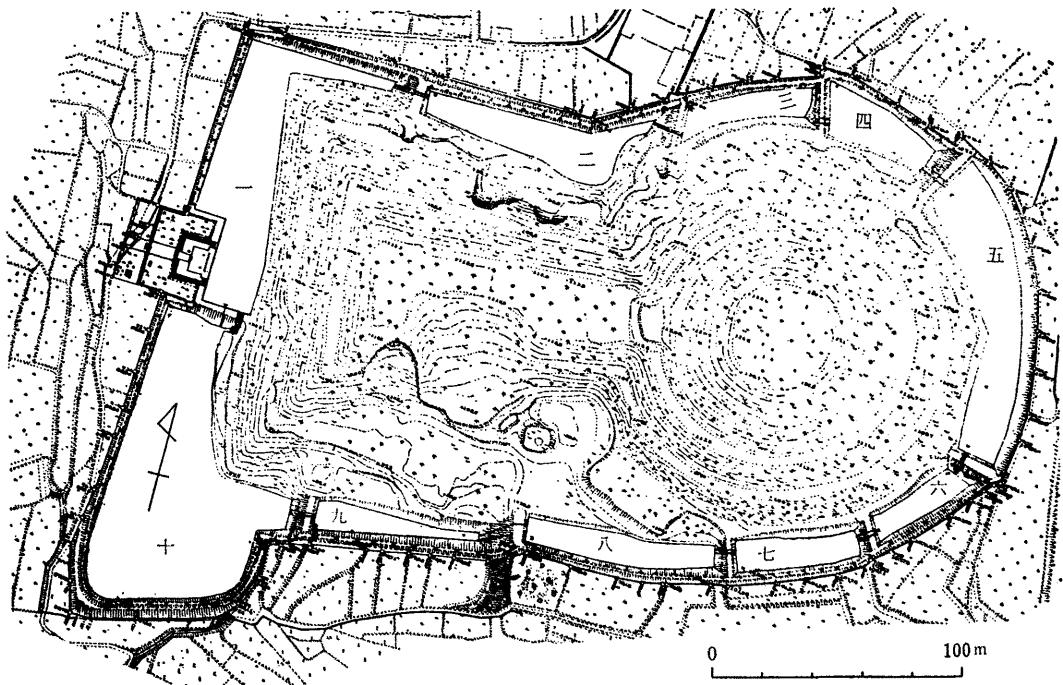
以上が男狭穂塚・女狭穂塚陵墓参考地外周埴垣改修その他工事に伴う調査の概要であり、これらの成果をふまえ、工事は予定通り実施した。

(福尾正彦)

#### 景行天皇山辺道上陵整備工事区域の調査

大和盆地の東南部には多くの古墳が知られている。それらは分布状況によりいくつかのまとまりに区分されるが、景行天皇山辺道上陵は大和古墳群に属する。全長約三〇〇メートルを計る前方後円墳で、墳丘の周囲には、一〇箇所の渡土堤によって階段状に区画された左右非対称の周濠がめぐっている。濠には前方部正面北側を起点とし、一号から十号までの番号が付されている(第26図)。

経年の波浪等により、墳丘裾等の浸食が進んできたため、護岸を中心とした整備工事が計画され、平成五年度にそのための事前調査を実施した。その成果は本誌前号において報告したが、今年度は実際の施工にあたり、立会調査を行い、事前調査時に検出された遺構が損なわれないよ



第26図 山辺道上陵地形図(1/3000)